

トタン屋根の夜

— マニラ郊外の再居住地における〈さみしさ〉について —

石 岡 丈 昇

1. 急変する日常感覚

マニラ首都圏ケソン市の中心地区から35キロほど離れたリサール州ロドリゲスの山間部にサウスビル8Bという再居住地がある。ここはマニラ首都圏のスクオッター住民の立ち退き後の再居住地として、2010年代にフィリピンの国家住宅庁 (National Housing Authority) によって開発がおこなわれた地区である。1990年代にはこの一帯は農地であったが、マニラ首都圏の都市再開発が活発になる過程で、再居住者用の「社会住宅」¹⁾が急増した。周りを山に囲まれ、地区内に傾斜も多く、ブライ川という河川の影響もあり、雨季には洪水被害が甚大である²⁾。本稿はこの再居住地における生活の実際的な困難について、エスノグラフィー調査より迫るものである。



写真1 山間部にあるサウスビル8B第五居住区 (2014年 筆者撮影)

私がサウスビルで調査をおこなうようになったのは、2014年からである。この年の1月にマニラ首都圏ケソン市のサンロケ地区で、スクオッター住民の大規模な強制撤去がケソン市役所によって実行された³⁾。そして、住居を奪われた80世帯が、このサウスビル8Bに送られた。私はこの強制撤去についてその只中で参与観察調査をおこなったが、同年の9月には再居住地へと送られた人びとの生活変動をめぐって再居住地でのフィールドワークを開始した。

再居住地については、そこに送られた人びとがその地に定着しない点が盛んに議論されてきた (Cernea 1997, Cernea 2000, Navarra 2014)。そして定着しない理由は、再居住地の労働・生活条件が過酷であるからという点が多く指摘されてきた。サウスビル8Bでも同様に過酷な条件があった。再居住地周辺には生業機会がなく、病院や学校などの施設も整っていない。さらに飲料水はかつての居住地であるスクオッター地区以上に高価で、ごみ収集は二ヶ月に一度という状況だった。再居住地は「死の区域 (dead zone)」であると言われるが⁴⁾、まさに労働・生活条件は惨めである。結果として、サンロケから送られた80世帯中35世帯が、移住後のわずか八ヶ月のうちに再居住地から消えていた。かれらはマニラ首都圏に戻っていった。

しかしながら私がサウスビル8Bで調査をするなかで浮上した問題は、再居住地のこうした労働・生活条件の困難と同時に、人びとの日常感覚の急変という事態が、そこでの生活に重くのし掛かっている点であった。再居住地に人びとが定着しない理由を、労働・生活の条件論から考察するだけでなく、日常感覚論としても検討しなおすことが必要に思われる。この日常感覚をめぐって、トタン屋根に打ち付ける夜の雨音について記しておこう。

2014年9月20日(土)、私はサンロケの強制撤去の調査を通じて知り合ったノエル(60歳⁵⁾、男性)の自宅を訪問していた。彼はサンロケでの反強制撤去運動のリーダー的存在であり、強制撤去によってサウスビル8Bへの移住を余儀なくされてからも、新天地でのコミュニティ形成に尽力してきた人物である。私は彼の家に泊まって、サンロケからサウスビル8Bに移り住んだ人びとに聞き取りをおこなっていた。

日中に聞き取りをおこない、夜は彼の家で食事をいただきながら雑談していた。昼は晴れていたが、夜になると雨となり、雷も時折鳴り響いた。

彼の自宅にはテレビがあった。そのテレビと一緒に観ながら、私は彼と雑談をし、その隣では彼の妻であるリタが赤ちゃんをあやしていた⁶⁾。

次第に雨音が強くなり、普段は開け放しにしている入口のドアを私たちは閉めることにした。いよいよ豪雨となり、猛烈な雨がトタン屋根に打ち付ける。トタン屋根は雨音をこだまさせながら、部屋中にその音を響き渡らせる。テレビの音も聞こえなくなり、私たちの会話も大声でなければ互いの声が聞こえない状況になった。赤ちゃんは泣き出し、リタは天井から吊るしたハンモックを揺らしながら寝かしつけている。トタン屋根がこだまさせる雨音は爆音と化し、私の鼓膜を打ち付ける。私たちは会話を中断した。

しばらくたって雨が少し弱まってから、私たちは会話を再開する。ノエルは、再居住地では先ほどのような豪雨が絶えないことを話し出した。「すごい雨音だろ、トモ（筆者のこと）。何も聞こえなくなる。サンロケでも雨になるとトタン屋根の雨音はすごかった。だけど、サンロケには光があった。密集してみんなが住んでいたからね。トモ、外を見てごらん。ここではみんなマニラに戻ってしまっていて、外には灯りもない。ここに居るのは限られた人びとだ。ここは、人がいない場所、活動のない場所。ここで、夜に、トタン屋根の雨音を聞いていると、俺は本当にマルンコットになる。マルンコットに耐えられなくなる」。

この語りにもあるように、私が再居住地を調査するなかで耳にすることの多かったのが「マルンコット (*malunkot*: さみしい)」という言葉である。再居住地の日常感覚を表すのが、まさにこの言葉である。トタン屋根に雨が打ち付け、音だけの世界が現れるというのは、スクオッター地区出身のかれらにとって、それまでとは異なった日常感覚が露わになる瞬間なのである。

私はこの語りを聞きながら、再居住地について考える際のひとつのポイントが〈さみしさ〉にあると感じた。サウスビル8Bには労働・生活条件が整っていないという大きな問題があるが、それと同時にこの〈さみしさ〉という日常感覚を考えることこそが、再居住地の社会学研究を前進させることになるだろう。スクオッターから再居住地へという移行において、実際のところ何が困難であるのかを捉えるために、本報告では日常感覚の急変という観点より、再居住地の生活を考察したい。

2. 再居住地をめぐる先行研究

2-1. 盲点としての再居住地

グローバルサウスの都市底辺層研究は、主にスラムを事例にして膨大に積み重ねられてきた (Roy 2003)。なかでも、社会経済的状况を実証研究によって明らかにするものはその代表的なアプローチである。1960年代より進められてきたこのアプローチでは、スラムに生活する人びとの惨めな状況が指摘されると同時に、かれらの生活創造の過程も捉えられてきた (Hollnsteiner 1970)。

スラムの人びとによる社会運動もまた、盛んに議論されてきた主題である。スラム住民による生活改善要求 (佐々木 1982) や立ち退き要求に対する反対運動のありよう (Karaos 1993) が研究されてきた。こうした社会運動は先鋭化して国家と対決することもあったが、こうしたラディカリズムを感情の勃発した「衝動的」な営みとして捉える研究もあれば、そこにはスラム住民の合理性が存在することを指摘する研究もある (Portes 1972)。

また、スラムの人びとの多くが農村からの出郷者であることを踏まえて、スラムを農村との関係において考察する「都市周縁層」(urban marginality) 研究も存在する。そこでのポイントは、出郷者が、農村の伝統的な文化や行為を都市生活においても保持することによって、都市的生活への統合を拒否することである。これはまた「貧困の文化」研究において、オスカー・ルイスがメキシコシティの五つの家族の事例から描出した点とも重なるものであった (Guerrero 1973)。

こうしたスラム研究は示唆的であったが、2000年以降にそこでの議論は抜本的な転回が果たされた。従来のスラム研究は、スラムを自然発生するものとみなしてきた。農村から都市への人の移動を、プッシュ=プル要因などから説明する研究もまた、同様の前提を持っていた。こうした前提に反して、2000年以降に登場したのはポストコロニアル都市研究の流れであった (Roy 2005, チャタジー 2015)。そこではスラムは自然発生するのではなく、国家によって生産されるものである点が強調された。国家はスラムを積極的に放置することで、21世紀のグローバルサウス都市の急激な経済発展を支える大工やメイドといった安価な労働力を調達可能にしているのであり、またスラムとして土地の価値を十分に下げた上でそこを再開発することで一挙に資本蓄積をおこなう (スミス 2014)。スラムを国家

の生産物と捉えるのが、今日のグローバルサウスの都市研究の主流である。

このようにグローバルサウスの都市をめぐるのは、スラムおよび、スラム住民の元々の住処である農村の貧困が議論されてきた。ところが今日では、スラムでも農村でもない、新たな貧困集積空間が登場している。それが本稿が対象にする都市底辺層の再居住地である。今日、グローバルサウスの都市では、ショッピングモールやゲーテッドコミュニティ、経済特区開発などが急速に進んでいるが、その背後では数多のスラムやスクッター地区が撤去されている（石岡 2015）。住居を奪われた人びとは、国家が準備した再居住地に送られる。こうした再居住地は、都市底辺層のみが集住する空間であり、都市底辺層の空間的追放（urban relegation）であるとも言われる⁷⁾。しかしながら再居住地については、ほとんど社会学的考察がおこなわれていない研究上の盲点となっている⁸⁾。こうした現実と研究の乖離を埋めるために、スラムでも農村でもない、再居住地に特有の社会生活とその困難を考察する必要が出てくる。

2-2. 制度的条件から日常感覚へ

再居住地をめぐるのは、社会学や人類学においては、まだ手付かずの研究状況である。一方で、紛争研究や災害研究では再居住地の調査がおこなわれている。紛争や災害は、人びとの強制移住を引き起こすため、そうした人びとが居住する再居住地の研究が進められてきた⁹⁾。

再居住地研究において主題となっているのは、労働・生活条件の悪化を捉えるものである。とりわけ、以下の九点が議論されてきた。1) 土地喪失、2) 職喪失、3) ホームレス化、4) 社会的周縁化、5) 食べ物が手に入らないこと、6) 疾病率と死亡率の増加、7) 共有地へのアクセス喪失、8) 社会的分断、9) 教育機会喪失、である（Cernea 1997）。農村地帯における再居住地への移住をめぐるのは、農民の土地の喪失が最大の争点になるのに対し（Cernea 2000）、都市から再居住地への移住をめぐるのは、労働や通勤やインフラなどの生活条件の喪失が争点となる（Choi 2015）。

マニラにおける立ち退きと再居住地への移住についても、職の喪失や長距離・長時間の通勤の発生が議論されてきた。またそこでの社会的サービスの不足も大きな課題であり、具体的には水や電気の未供給、貧弱な材質で建造された家屋、病院や学校やコミュニティセンターの未建設といった問題点が指摘されている（Navarra 2014）。これらは重要な制約条件である

が、こうした紛争研究や災害研究の知見を社会学の研究へと接続するためには、こうした条件がどのように人びとの社会生活において現象しているのかを捉えることが必要になる。

その点において参考になるのが、マニラのスクオッター地区から再居住地への移住が「雇用 (employment) から自営 (enterprise) へ」という変化を生み出していることを指摘したアナ・マリー・カラオスの研究である (Karaos 2017)。カラオスの研究は、二点において重要である。第一に、再居住地研究を、かつて生活していたスクオッター地区との関連で捉える点である。スクオッター地区から再居住地への移住という変化に照準することで、再居住地をそれ自体のみで捉えるのではなく、スクオッター地区での生活との乖離という点から考察したのである。第二に、再居住地で必要となる生業 (livelihood) とは何かについて、踏み込んで考察した点である。再居住地研究では生業機会の不足が盛んに主張されてきたが、その中身がいかなるものなのかを考察してこなかった。スクオッター地区では雇われて働く形式—大工やタクシー運転手や料理人など—が一般的であったのに対して、再居住地では自営業—携帯電話の修理業や数珠の作成販売など—として経営していくことが求められる。再居住地周辺には、「雇用」を可能にする場はないため、「自営」が求められるのである。だが、そうした働き方をしたことの無い元スクオッター住人には、この変化は大きな障壁となる。

本稿では、再居住地の労働と生活の困難を、スクオッター地区のそれとの関連で捉えるカラオスの研究を踏まえながら、カラオスが照準したような生業の次元のみならず、住人たちの日常感覚の変化の次元に注目する。再居住地研究において、生業は大きなポイントであるが、同時にまた雨への対応だったり、ゴミ捨ての仕方であったり、周囲の喧騒であったりといった日常感覚の次元もまた、再居住地に送られた人びとの生活を考察する上で不可欠のものだろう。スクオッター地区から再居住地に移住することには、いかなる日常感覚の変化を伴うのか。本稿は、この点に注目しながら、再居住地の社会学研究の論点を提起することを目指すものである。

3. スクオッター地区から再居住地へ

3-1. かつての居住地ごとに閉じる社会関係

本稿の事例地であるサウスビル8Bは、2010年に国家住宅庁によって建

設された再居住地である。フィリピンの行政末端単位であるバランガイでいえば、サン・イシドロに属する。このサン・イシドロには、カシグラハンという1999年に建設された大規模な再居住地があり、そこに隣接していた農地が開発されて、サウスビル8Bはできあがった。

サウスビル8Bは、五つの居住区 (phase) に分かれており、本稿ではそのうちの第五居住区 (phase 5) を取り上げる。この居住区には605世帯、およそ4,000人が居住している。このうち80世帯がノエルをはじめとして、2014年のケソン市サンロケ地区の強制撤去後に、国家住宅庁が手配したトラックで送られてきた人びとであった。第五居住区の残りの世帯は、マニラ首都圏のさまざまなスクオッター地区から、さまざまな理由で移住を余儀なくされた人びとである。その理由には、「危険区域 (danger zone)」のスクオッター地区に住んでいる、河川沿いで洪水の被害にあうことが予想されるスクオッター地区に住んでいる、などがある。つまり、元々住んでいた場所の異なる都市底辺層の人びとが、まとめて送り込まれることで形成されるのが再居住地である。よって、再居住地は「貧困移転事業」であるとも言われる¹⁰⁾。

再居住地では、かつての居住地を同じくする人びとの交流はおこなわれるが、それを超えた社会関係の形成はほとんど見られない。第五居住区においても、サンロケからの移住者はかれらのみで結束しており、それを超えた社会関係の形成はなかなか見られない。出身コミュニティを超えた社会関係の困難をめぐっては、サウスビル8Bの隣の再居住地であるカシグラハンを調査した研究でも同様の指摘がある。カシグラハンでは、かつての居住地を超えた社会関係が生み出されるのに、10年もの時間を要したことが記されている (Navarra 2014)。この事実が示すのは、再居住地に送られた人びとにとって、かつての居住地を超えた社会関係を築くことが、むしろリスク (ドラッグ汚染や犯罪への巻き込みなど) を伴うものであり、できるだけ元々知っている人びととのみ社会関係を維持する傾向があることである。

ノエルたちが2014年2月にサウスビル8Bに来たとき、かれらもまた、先に居住していた他の地区出身者との協働を模索するというよりは、サンロケ出身者たちで結束して新たな生活を成立させようと奮闘した。では、かれらが開始した再居住地での生活はいかなるものであったか。

3-2. 再居住地生活の始動

ノエルたちがサウスビル8Bに送られて来た際、かれらがまず直面したのは、家の補修をすること、および、水や電気など生活インフラの供給の確認であった。

かれらが再居住した第五居住区は、幸いにも、川からやや離れた位置にあり、やや高台の立地のため、洪水のない地区であった。だが、隣接する第四居住区は、川に近く、標高もやや低いため、大雨による洪水被害が頻繁に生じる。ノエルたちは、自分たちにあてがわれた第五居住区の立地に少し安心をしたが、しかしながら別の問題が山積みであった。

まず家の建造材質の脆弱さが問題であった。とりわけ、壁面が脆弱で、いくつかの家では、雨の際に壁に染み渡った水が屋内に浸透する状態だった¹¹⁾。また家のドアがついておらず、トイレには便器がなく穴があるだけだった。こうした壁やドアやトイレは、後に国家住宅庁によって修繕されたが、当初かれらはこのように劣悪な住環境に投げ入れられた。

家の建造構造は一律で、32平米の土地に床面積22平米の一階建てが並んでいるというものである。そのためどれも似たようなものであり、住人たちは各家の壁面に書かれた家番号のみを目印に、どれが自分の家であるのかを見分けた。形状のさまざまな家が存在したスクオッター地区とは対照的であった。サンロケから送り込まれた当初を、住人のひとはこう語る。

毎朝、水を買に行くけど、最初はよく家を間違えたわ。全部、同じなんだもの。サンロケでは家を間違えたりしなかったわ、全部違うんだから。一目見ればわかったものよ。でもここでは全部同じ。目印は壁の家番号だけね。私が間違えて、よその家に入るでしょ。そうすると間違われた家の人も、同じように間違えた経験があるから、にっこりと微笑むのよ。それで私もにっこりと微笑んで、自分の家を探しなおすのよ。(タレサ、女性、47歳¹²⁾)

スクオッター地区の家には個性がある。家の形がバラバラであるし、さらに壁画を描いたり、二階を増設したり、それぞれの個性が際立っている。だが再居住地はどれも同じような家屋が建ち並ぶ。タレサの語りからは、この感覚的差異に関する戸惑いを読み取ることができるだろう。

この語りからもう一点わかることは、住人が水を家の外で買ってこなければならない点である。その水の料金は、再居住地ではスクオッター地区以上に高いという問題があった。サウスビル8Bでは、一容器16リットル分を3ペソ（1ペソ＝2.42円¹³⁾）で購入しなければならなかった。これはサンロケの二倍の値段である。さらに、水を運ぶ台車を1時間20ペソで借りる必要があり、住人には大きな経済的負担となった。これは洗い物などに使う生活用水であり、飲み水についてはさらに高価で一容器16リットルを25ペソで買わなければならなかった。よって住人たちは、少しでも水に関する支出を減らそうと、雨の日にはポリタンクに雨水を貯めて、生活用水として使った（写真2）。

かれらにとって助かったのは、毎週土曜日の午前11時半からおこなわれた教会主催の炊き出し活動であった。これは「貧者への奉仕人（the servants for the poor）」と名づけられた活動プログラムであり、この炊き出しで食事をするために、ノエルさんたちは、実施場所の第二居住区まで歩いて行った¹⁴⁾。

以上のように、再居住地の環境整備を試みながらも、かれらは働くことを止めるわけにはいかなかった。サンロケの自宅を強制撤去された際、かれらには5,000ペソの支度金が国家住宅庁によって支払われた。だがこの支度金は、家の補修や生活備品を揃える中で、すぐに尽きてしまう。かれ



写真2 雨水を確保する（2016年 筆者撮影）

らは、再居住地の生活環境の整備だけに時間を使うことができなかった。働くことで稼ぎを得なければ、すぐに困窮してしまうのである。だが、再居住地の周辺には職を得る機会がない。かれらの採った戦略はとてもシンプルなものだった。世帯の稼ぎ手は、マニラ首都圏まで通勤して従来の職場で働くことで、稼ぎを確保し続けようとしたのである。

3-3. 通勤

だが、マニラまでの通勤は、絶望的な日々を生み出した。第一に、交通費による家計の圧迫という問題が生じた。サウスビル8Bからマニラ首都圏まで通勤するには、交通費だけで一日あたり150ペソもの費用がかかるのである。たとえばノエルの娘世帯を事例に挙げるならば、彼女の夫（42歳）はマニラ首都圏のマカティ市のコニカ・ミノルタの工場で技師として働いていた。彼は月曜日から土曜日まで、毎朝5時に家を出て、近くのトライシクル乗り場に向かう。トライシクルでサン・イシドロのバス停留所まで向かい（20ペソ）、そこからマニラのケソン市のコモンウェルス市場までジブニーで移動する（20ペソ）。そこで別便のジブニーに乗り換えてエドサ通りまで向かう（15ペソ）。エドサ通りからはバスとジブニーを乗り継いで工場まで移動する（20ペソ）¹⁵⁾。所要時間は片道二時間、渋滞がひどい場合は三時間を要し、交通費は往復で150ペソとなる。彼は日給550ペソで働いていたが、遠隔地で朝5時に家を出て、夜11時に帰宅する。仕事と通勤で、一日のうちの18時間を費やしているのである。さらに、サンロケに居住している時以上に食費もかかるようになった。

同じくサンロケから強制移住をさせられたアレックス一家も同様の困窮に陥っていた。夫が高齢のため、妻が一家の収入を支えていた。彼女はマニラ首都圏のケソン市の工場で機材メンテナンスを担当しており、深夜労働をおこなっている。月曜日から土曜日まで、午後7時から午前3時まで働いている。交通費は一日あたり115ペソ必要である。出勤時には夕方で道路が非常に混むため、三時間前の午後4時には自宅を出発する。帰宅は早朝のため、道路渋滞はほとんどなくスムーズに戻れるが、交通費と通勤時間の増加によって厳しい境遇にあることを私に語ってくれた。こうした交通費と通勤時間の増加は、再居住地で幾度も耳にした事柄である。

かれらの多くはマニラ首都圏でも最低賃金かそれ以下の雇用状況にあり、最低賃金の場合、日給は466ペソとなる（2014年9月時点）。給料の三

分の一が交通費で消えてしまう事態は、かれらをさらなる困窮へと陥れるものであった。そのため、サウスビル8Bでは、主たる家計支持者が休日出勤をサンロケ在住時以上におこなうようになった。休日出勤をおこなわなければ、経済的に暮らしていくことができなくなったからである。

第二に、身体がもたなくなるという問題が生まれた。かれらは身動きの取れない、窮屈な車内で片道二～三時間を過ごさなければならない¹⁶⁾。もとより、身動きの取れない車内は、かれらにとって馴染みあるものである。マニラ首都圏のジブニーや乗合タクシーは大体においてそうであった。だがマニラ首都圏内での乗車時間と、再居住地からマニラ首都圏に向かう通勤での乗車時間は、その長さが随分と異なった。毎日、往復四～六時間を身動きの取れない車内で過ごすことは、かれらの身体を非常に消耗させるものだった。さらに、既に述べたように、交通費の支出をカバーするためにかれらは休日出勤をすることになり、マニラ首都圏に住んでいた時以上の頻度で通勤することを余儀なくされた。

そして通勤が長時間になるということは、休息時間をそれだけ失うことでもある。ニール・スミスが「破壊的な身体的回復 (desperate resilience)」(Smith 2002: 436) と呼んだ事態が、かれらを襲う。睡眠時間が少なくなり、家族団欒の時間も奪われ、近隣仲間とお酒を飲む機会も減る。そして身体が疲れ果てていく。

家計の面でも、身体の間でも、再居住地からの通勤は、かれらの生活とそのリズムを蝕むものだった。それに対応するために、かれらが採った戦略はふたつあった。ひとつは、出勤日を減らし、その代わりに一日あたりの労働時間を増やして超長時間労働をする方法である。これはタクシーやトライシクルの運転手に典型的であり、二四時間ぶっとおしで運転することで、一回あたりの稼ぎを増やそうとした。また工場で働く人びとも、残業をできるだけ最後までおこなおうとした。一回の勤務でくたくたになるまで働くかわりに、通勤の頻度を少なくしようとした。

もうひとつは、平日はマニラ首都圏でホームレス生活をしながら働き、週末に再居住地に戻る方法である。タクシーやトライシクルの運転手の場合、車内で眠るのが一般的であった。工場労働や建設労働の場合、親戚や友人の家に居候させてもらうか、そうした伝手がなければ、バスターミナルや公園の一角で体を休ませた。平日をマニラ首都圏で過ごして、土曜日の夜にサウスビル8Bに、稼いだお金を手にして戻った。「平日ホームレ

ス」の生活をすることで、通勤をめぐる家計的身体的問題を乗り越えようとしたのである¹⁷⁾。

3-4. 続出する帰還者

サンロケから来た住人たちは、このようにサウスビル8Bで新たな生活を作り出そうと奮闘した。しかしながら、結果的には、多くの住人にとって、サウスビル8Bでの生活は長続きするものではなかった。超長時間労働や「平日ホームレス」の日々は、身体的な負担が大きかった。また家族が離れ離れの時間が増えることで、不倫の件数も増えた。マニラ首都圏で働く夫が、稼いだお金を散財してしまうこともあり、再居住地に残された妻子―再居住地は基本的に女性と子どもと老人の空間であり働き盛りの男性の姿は見かけることが非常に少ない―が困窮することが少なくなかった。よって、母親たちの中には、さらなる「社会住宅」建設のために再居住地に来ていた建設労働者を相手に売春をすることで、困窮を逃れようとする者もいた。

結果として、本稿の冒頭に記したように、80世帯中35世帯がわずか七ヶ月のうちに再居住地から去っていった。再居住地では、住人たちは自分たちのことを「再居住者 (relocatees)」と呼ぶ。それに対して、再居住地からマニラ首都圏へと舞い戻った人びとは「出戻り者 (returnees)」と呼ばれる。「スクオッター」が「再居住者」になった先に「出戻り者」となっていった。そして「出戻り者」を生み出すことは、仕方のないこととして、人びとに理解されていた。

4. 〈さみしさ〉の構成

再居住地に留まったのは、元スクオッター住人の中でも、相対的に家計に余裕がある世帯であった。たとえばノエルは、かつてサウジアラビアに出稼ぎに行ったことのある大工であり、再居住者の中でも、経済的にも技能的にも恵まれていた。また、彼の親戚には、現在、海外出稼ぎをしている者もあり、その仕送りが家計の大きな支えになっている。また別の住人は、サウスビル8Bとマニラ首都圏の中間地帯にあるパヤタスのリサイクルショップで働いている。パヤタスには、ゴミ処理場があり、その周辺にはスカベンジャーから鉄や銅線を買取るリサイクルショップが数多くある。彼は、小型オートバイを持っていて、それを使って毎日通勤している。

再居住地での生活形成に奮闘すべくかれらは、地場産業を作り出すべく、いろいろな試みをおこなった。スリッパ、ココナッツロープ、石鹼、焼売、ハンバーガー、雑巾と、さまざまなものを作ったが、どれも失敗に終わった。これはまさに、第2節で引用したカラオスのいう「雇用から自営へ」という流れに符合するものだった。かれらが元々居住していたサンロケでは、かれらは雇われ人として、しっかり働くことで、収入を確保してきた。だが今では、小規模ではあるが、起業して自営しなければならなくなった。マイクロ・ファイナンスが自己責任倫理と新自由主義的イデオロギーに親和的であることを、バングラディシュを事例に坂本真司は論じているが(坂本 2010)、同様のことはフィリピンの再居住地にも当てはまる。再居住地に労働や生活の基盤を作れないことの言い訳として、国家住宅庁はこうした自営業の推進を図っているといえよう。

そうしたなか、再居住地にとどまった住人のうちの何人かが向かった先が、ドラッグ売買である。シャブ売買は、生業のない住人にとって、短時間で非常に効率よく現金を稼ぐことができる手段である。長時間通勤をする必要もなく、工場で残業をしながら超長時間勤務をする必要もなく、平日ホームレスになる必要もない。自宅で妻子と過ごしながら、同時に稼ぎも手に入れることができる。だがドラッグ売買には、トラブルとむきだしの暴力が控えている。サウスビル8Bでは、2015年に40代の夫婦の惨殺体が発見されたが、それはドラッグ売買に関係するものであった。

ここまで論じてきたように、再居住地は、かつての居住地を異にする元スクオッター住人たちの集住地であり、そのつながりを超えた社会関係は生まれづらい。よって、かつての居住地を同じくする人びとで新たな生活を作り上げようとするが、再居住地周辺には生業の機会がなく、マニラ首都圏までの長時間通勤が不可欠となる。それは家計的にも身体的にも大きな負担となり、さらには家族崩壊も引き起こしてしまう。そのなかで、多くの住人が再居住地での生活を諦めて「出戻り者」としてマニラ首都圏に戻っていく。結果的に、再居住地における元サンロケ住人による生活共同は困難になり、さらに“クイックマネー”の仕事であるドラッグが入ってくることで地域に暴力をめぐる問題が登場する。

冒頭に述べた〈さみしさ〉が構成されるのは、こうした文脈においてである。再居住地での生活を共同で作り上げようと奮闘するものの、多くの人びとがそれを諦めて、再居住地から去っていく。それが最も実感される

のが夜の時間である。昼は、スクオッター地区も再居住地も、それぞれが仕事や子育てなどで忙しい。だが夜になると、スクオッター地区であれば、みなが帰宅し、あたり一帯で、テレビの音やカラオケの歌声、さらに酒を飲んで笑う声が聞こえるのが当たり前だった。

サンロケにはみんながいたのよ。「みんな」っていうのは、大人も子どもも老人も、男も女もバクラ¹⁸⁾も、みんながいたのよ。夕方になって仕事から帰ってきたら、みんながそこで、にぎやかにしていたのよ。でもここには人がいない。若い人や、働かなきゃいけない人は、ここには帰ってこない。子どもとその母親と高齢者、それがここにいる人。働く人は、男も女も、ここにはいないのよ。(リタ)

再居住地は「子どもとその母親、それに高齢者」の空間であるとリタは語る。それはノエルの口癖である「ここには人間の活動がない」というものともつながっている。家はあるけど活動はない。それが再居住地であると、ノエルはよく語る。この日常感覚を示すために、ここでは写真を二枚提示したい。写真3と4は、サウスビル8Bとサンロケの日常光景である。これらを比べると、再居住地がいかに「活動のない」空間であり、スクオッター地区がにぎわいのあるそれであるのかわかるだろう¹⁹⁾。サウスビル8Bは閑散としている。写真に写っているのも、犬が一匹と奥の方に女の子が二人いるだけである。これは、私がわざと、人の少ない時間と場所で撮影したものではない。この閑散としている光景が、再居住地では当たり前なのである。反対に、左の写真が示すように、スクオッター地区であれば、日中であっても、多くの人が出歩いている。このような、にぎわいの対照性こそが、〈さみしさ〉を生み出すのである。

夜になるとこの〈さみしさ〉は、より強く感じられる。サウスビル8Bでは、夜に灯りのついている家が非常に少ない。繰り返すが80世帯中35世帯²⁰⁾は再居住地を去っているのであり、さらに再居住地に止まりながらも留守にしている世帯も多い。灯りがポツポツと点在するだけの光景は、スクオッター地区ではありえなかった。スクオッター地区では密集した家々の灯りがついており、夜は毎日12時くらいまで人間の活動を感じることができた。だが再居住地では、灯りのついている家の方が少なく、さらに街灯も無いため、静かで真っ暗な空間が登場する。そこに雨が降る

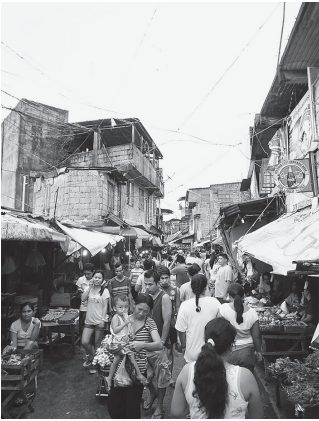


写真3 サンロケの日常的光景
(2014年 筆者撮影)



写真4 サウスビル8Bの日常的光景
(2014年 筆者撮影)

と、トタン屋根の音だけが響き渡ることになり、住人はスクオッター地区とはまったく異なった、寂寥を覚えることになる。トタン屋根の音だけがすべてとなる世界が現れるのである。五感のうち聴覚だけが突出したような世界となる。

〈さみしさ〉は、「出戻り者」の増加のみならず、再居住地に止まっている世帯においても、世帯人数が減少する事実とも深く関係している。再居住地ではスクオッター地区に比べて、一世帯あたりの人数が少ない。スクオッター地区の平均世帯員数が七人であるのに対して、再居住地のそれは四人である²¹⁾。サンロケからの移住家族の事例からも例証しておこう。図1はA家族の世帯構成を示したものである2014年1月の強制撤去前までは、この家族は7名で暮らしていた。夫婦と子ども3名、それに居候者が2名という構成だった。だがサウスビル8Bでは、妻子のみの4名で平日は暮らしている。まず、再居住する段階で、居候者2名はいなくなった。そして、再居住後には、夫が仕事のためマニラで「平日ホームレス」生活することになり、再居住地にいるのはこの4名のみとなったのである。「出戻り者」として去っていった世帯数のみではなく、「再居住者」としてそこに止まっている世帯の世帯員数の急減もまた、〈さみしさ〉を作り出す大きな条件になっているのである。なおこの点は、再居住地におけ

世帯員数の減少

7名(サンロケ) → 4名(サウスビル8B)

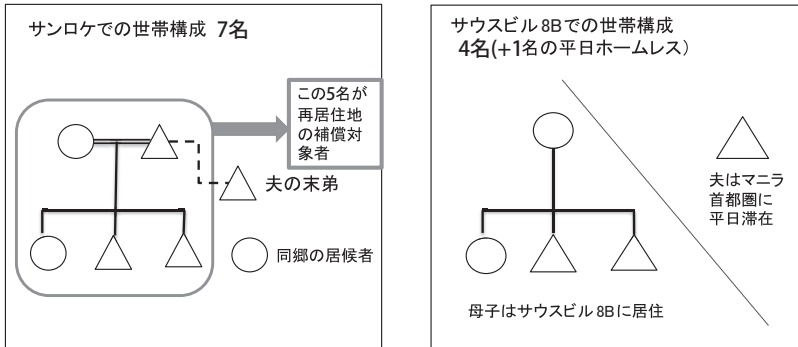


図1 世帯員数の減少図(サンロケ7名からサウスビル8B4名へ)

る家事や育児などの再生産活動の困難とも深く関わっていることも言及しておきたい。スクオッター地区では、周辺に多くの人手があり、そうした人手をうまく借りながら、家事や育児はおこなわれてきた。だが、再居住地では、人手が少なく、基本的にすべての家事と育児をひとつの世帯内で、母親が面倒を見なければならない状況生まれる。夫もいない。再居住地は再生産活動をも困難にする。

また、スクオッター地区では当たり前であった居候者が、再居住地ではいなくなることも〈さみしさ〉の構成と深く関わっている。居候者は、A家族の事例のように、世帯員の親戚や同郷者が、マニラ首都圏で求職中に身を寄せることによって生まれる。かれらは職を得ることを待ちわびながら、近親者宅や友人宅に居候をするのである。こうした居候者は、受け入れる側の世帯にとっても、好都合でもある。たしかに食費は若干多くはかかるようになるが、それ以上に、居候者は日常生活において貴重な人員にもなるからである。居候者がいることで、子守りや洗濯、水汲みや買い物などの雑業を、かれらに託すことができる。だが、再居住地には、居候者はいない。なぜなら、人里離れた再居住地には、そもそも職を得る機会がないためである。こうして再居住地では居候者のいない空間ができあがる。

以上を整理するならば、再居住地においては、①世帯数が減少し、②そこに居住している世帯も世帯員数が減少し、③居候者もやってこないという、三つの条件が重なり合って〈さみしさ〉が構成されているといえる。そしてこの〈さみしさ〉は、大雨でトタン屋根の音だけが聞こえ、周辺の家には灯りのつくことのない夜の時間において、住人には最も強く感覚されるのである。そして、この〈さみしさ〉に耐えられず、「出戻り者」が、また新たに生み出されていく。

再居住地において、例外的に活気が見られるのは、二週間から三週間に一度、ゴミの回収車が訪れた時である。ゴミの回収は、不定期であり、トラックが来た時に、住人は急ぎで貯めておいたゴミを持って回収車に投げ込んでいく。「バスーラ」（タガログ語でゴミのこと）という叫び声を、子どもたちがあげる。そうすると、一斉に第五居住区にいる全員がトラックに向かって、ゴミを手にして、走り始めるのである。普段「活動のない空間」が、ゴミ捨ての際にのみ、活気が見られるようになるというのは、いかに再居住地が特異な場であるのかを示しているだろう。



写真5 唯一活気のあるゴミ捨て（2014年 筆者撮影）

5. 宙吊りの世界

本稿ではマニラ郊外の再居住地における生活の困難について、日常感覚の変化という次元から記述してきた。それではここまでの記述から、どのように社会学の理論的・方法的考察を展開できるのだろうか。本稿を締めるにあたって、ここで「宙吊りの世界」という独自の概念を挿入したい。

紛争研究や災害研究の分野で牽引されてきた再居住地研究において暗黙の前提になってきたのは、再居住地の生活にいかに住民が「適応 (adaptation)」できるのかを分析するという研究方針である。たとえばフィリピンとインドネシアの再居住地の比較研究をおこなったメリサ・クエテリオ・ナバラは、再居住地における「ウェル・ビーイングの回復のためには、個々人や家族のネットワーク、つながり、信頼、規範が不可欠であり、さらに非自発的な移住を強いられた人びとが、新たな地域コミュニティへと適応しそこに統合されることが重要である」と論じている (Navarra 2014: 122-3)。彼女の研究では、再居住から何年経てば適応が可能になるのかなどが、ソーシャル・キャピタルの形成という観点から分析されている。

しかしながら本稿では、「適応」ではなく「宙吊り」を主題とすることの重要性を提起したい。適応とは、再居住地という新しい世界への定着をゴールに据えることで構成される概念である。だが本稿が捉えてきたのは、新しい世界への定着には長期の時間を要することであり、そこに至るまでの宙吊りの時間こそが、住人にとっては地獄となる点である。よって、適応という主題に宙吊りの時間を回収してはならず、むしろ、宙吊りそれ自体を独自に探究することで新たな研究課題が切り拓かれると本稿では考えたい。

この点は、先行研究の検討でも提示したカラオスの研究を前進させることにもつながる。カラオスは、第一に再居住地をスクオッター地区との関連において捉え、第二に再居住地とスクオッター地区では必要とされる生業の中身が変化することに踏み込んで議論をおこなった。つまり、カラオスは、スクオッター地区から再居住地へという、二つの地点の「変化」を捉えようとしたのである。変化を捉えることは、重要な論点を生み出す。たとえば、スクオッター地区に居住していた頃より、夫がミンダナオ島などでの建設労働の仕事のため留守がちであった世帯であれば、妻子を中心

とした世帯構成が主流となる再居住地の生活にも対応可能かもしれない。だが、夫婦で同居しつつ、居候者や近隣仲間との関係も活用して日常生活を送ってきた者からは、再居住地での生活はその変化に戸惑うだろう。ある生活を送ることの困難は、現在の条件のみならず、以前の条件や世界との対比—それはしばしば変化や落差を伴う—において現れるのである。

こうした変化の次元をカラオスは捉えながらも、しかし最終的に彼女は、再居住地への適応がいかにして可能かという問いから離れようとしなない。それに対して本稿が宙吊りという概念から切り拓きたいのは、適応や定着をゴールに見据えて変化を議論するのではなく、変化そのものの渦中を捉える議論である。そのために、ここでアルフレッド・シュッツの他所者をめぐる論文を引いておこう。シュッツは、他所者について研究することが、同化や適応の研究とは異なった新たな主題を提示することを主張している。

本稿は社会的同化や社会的適応の過程を扱うのが目的ではない。……むしろ本稿の目的はあらゆる社会的適応の可能性の前提となり、その社会的適応の必要条件をも含むような集団への接近状況 (the situation of approaching) を論ずることにある。(シュッツ 1997: 4)

接近状況を問題化すること、ここにシュッツのねらいがある。同化や適応といった用語は、移民した先の社会の制度や文化を前提にして、移民たちがどのようにそれを馴染みあるものにするのか (= 適応)、あるいはいかに当該社会が移民を馴染みある存在に仕立て上げるのか (= 同化) といった点を議論する。だが接近状況を問題化することは、それとは異なった議論のありようを探ることである。

新たな環境の下で、物事が故郷で思い描いていたのと全くかけ離れているという他所者の発見は、自分の習慣となっていた「日常的思考 (thinking as usual)」の妥当性への信頼を揺るがす最初の衝撃となる。他所者が接近集団の文化的パターンについて抱いていた見取図だけでなく、故郷集団内で通用していた自明の解釈図式の全体までもが無効となってしまう。(シュッツ 1997: 13)

移民先の世界で自明とされる見取図を持たないだけでなく、生まれ育った世界において身につけてきた自明の解釈図式も崩壊していく。もはや馴染みある世界には居らず、かといって、行き着いた世界に親しんでいるわけでもない。この「どちらでもない (in-between)」状態にある者を、シュッツは捉えようとする。そして、このどちらでもない状態こそが、本稿でいう「宙吊りの世界」である。それは「AからBへ」という移行ではなく、「AでもBでもない」という状態である。

他所者をめぐるシュッツの論文は、スクオッター地区からは放出されたが、再居住地には定着していないという、どちらでもない状態を記述した本稿においても示唆的である。〈さみしさ〉とは、この宙吊りの世界において、現象する日常感覚にほかならない。スクオッター地区から放出されたからこそ、その感覚は実感されるのであり、また一方で、再居住地の生活に馴染んでしまえば、その感覚は鈍り、やがて消えていくだろう。宙吊りの世界だからこそ、〈さみしさ〉が人びとに差し迫ってくる。冒頭に記述したトタン屋根の夜の光景とそこでの会話は、この宙吊りの世界を示すものであり、そこで現象する〈さみしさ〉に押し潰されそうになる諸個人のありようである。

再居住地での日常感覚が馴染みあるものとして身体に根ざすまでには、長期間を要する。その期間が到来する前に、再居住地の住人は〈さみしさ〉に苛まれ、にぎわいのあるマニラ首都圏のスクオッター地区に舞い戻っていく。新たな日常感覚が馴染みあるものになるまでの時間よりも、宙吊りの世界を耐えることのできる時間の方が短いのである。なぜ「再居住者」は「出戻り者」になるのか、という問いに対して、生業機会の不足や、水および電気といった環境基盤の脆弱さといった制度的条件からそれを検討するだけでなく、日常感覚の次元からも応答することが求められているだろう。かれらは〈さみしさ〉に耐えられないから、マニラ首都圏に戻るのである。

注

- 1) 「社会住宅」と鉤括弧をつける理由は、再居住地の住宅は無償提供ではなく、住人に買い取らせる方式を国家住宅庁が採用しているためである。つまり、それもまた、利潤を生み出すことを念頭に置いたプロジェクトであることを確認するためである。再居住地の「社会住宅」をめぐる矛盾について

- は、Beltran (2019) を参照。
- 2) 「サウスビル8Bで生活するならば、真っ先にゴムボートを買わなければならない」という冗談が、マニラ首都圏の都市底辺層の人びとのあいだでは有名である。それくらいこの地帯は、洪水がひどいのである。
 - 3) 詳細については、石岡 (2015) を参照。
 - 4) 『『危険区域』から『死の区域』へ』というのは、スクオッター住居の強制撤去に反対する運動団体でもあるカダマイ (KADAMAY: Kalipunan ng Damayang Mahihirap の略称) の人びとが好んで使用する標語である。スクオッター地区のうち「危険区域」—鉄道沿いや河川敷など—と政策的に指定された箇所に住む人びとは、再居住地への移住が義務化されるようになっていく。そうした人びとは、しかしながら、もっと惨めな「死の区域」としての再居住地にに送られるというのが、この標語の意味するところである。
 - 5) 年齢は2014年時点でのものである。
 - 6) この赤ちゃんは、ノエルとリタの孫ではない。サンロケから一緒に送られてきた若い夫婦が、再居住地では仕事がないため、マニラ首都圏で働き続ける選択をしたため、ノエルとリタでかれらの子どもを預かって面倒をみているためである。この若い夫婦は、週末に再居住地に戻ってきて、そのときのみ赤ちゃんと一緒に過ごす。ベビーシッター代として、この夫婦はノエルに500ペソを毎週支払っている。
 - 7) 空間的追放については、ロイック・ヴァカンによる重要な研究を参照 (Wacquant 2007)。
 - 8) 例外としてアナ・マリー・カラオスによる調査研究がある (2017)。彼女の研究については、本稿の後の箇所で言及する。
 - 9) 非自発的な移住をめぐるのは、以下の三類型が使われることが多い。開発による再居住、紛争による再居住、災害による再居住である (Navarra 2014: 12-13)。このうち紛争による再居住は難民研究の中心的な主題であり、災害による再居住は災害や震災研究の中心的な主題である。本稿は、開発による再居住に該当する事例研究となる。
 - 10) さらに元々、郊外の再居住地周辺に住んでいた人びとからは、スクオッター住人が大挙してやって来ることに恐怖を感じたともいわれる。アンドレ・オルテガによるマニラ郊外の批判的地理学の研究には次のように記されている。「モンタルバンに長らく居住していた人びとは、カシグラハンの建設は、町の悪の兆しであった。それは実現して欲しくはない計画であり、かれ

らは来るべき『スクオッターの侵入 (squatter invasion)』に怯えた」(Ortega 2018: 300)。

- 11) 私は、本稿でも文献を引用しているアテネオ大学のカラオス氏の実施する再居住地のフィールドワーク（ブラカン州バラグタス）に同行して、彼女と一緒に住民への聞き取りをおこなったことがある（2014年9月22日）。その際においても、壁のつくりの脆弱さは、聞き取りの主要なトピックのひとつであった。なお、ある世帯を訪れた際に、あまりにもその貧しさを感じて、私はカラオス氏が質問をしている間に、次のようなノートを記した。再居住地のひとつのリアリティとして銘記しておきたい。「この家は本当に貧しい。家にモノがない。廃材を組み立てて作ったベッドに、バーガーキングの布ポスターをかけてベッドにしている。その上には破れたカバーのかけられた枕とブランケットが、段ボールの中に無造作に詰め込まれて、置かれている。テレビと音声ステレオがあるが壊れていて、コンセントにもつながれていない。テレビには薄汚れたピンクの花柄の布がかけられている。つながっているのは、扇風機だけだが、ふたつあるうちの、ひとつは壊れている。壁にはキリストの像がかけられている」（2014年9月22日（月）午前10時すぎ）。夫はマニラでジブニーの運転手をしており、夜はその車内で寝る生活をしており、妻子がそこでは生活している。聞き取り対象であった妻は、聞き取り中に子どもに昼食を食べさせ始めたが、おかずはなく白米だけだった。
- 12) 年齢は2014年時点でのものである。
- 13) この通貨レートは、強制撤去が実行された2014年1月27日のTTSレートである。
- 14) この後、第五居住区においても、パヤタスの支援活動をおこなっていた団体によって炊き出しの実施が企画された。だが、資金獲得ができず、実現には至らなかった。
- 15) 2020年1月の私による現地調査では、サン・イシドロの停留所からエドサ通り（トライノマ）まで、AUVでの移動が直通していた。乗車料金は50ペソである。AUVとは車の種類を意味するものでAsian utility vehicleの略称である。SUV（sports utility vehicle）の大衆版として東アジアを中心に販売されている車種であり、フィリピンの公共交通としては、一台に運転手を除いて14人ほどが乗車して移動する。
- 16) 日本や西欧や北米において、公共交通は時刻表で動く。だが、マニラをはじめ、グローバルサウスにおいて、公共交通は乗車数がいっぱいに揃ったと

ころで動く。これは言い換えれば、マニラでは、タイム（日本、西欧、北米）ではなく、タイミングで公共交通が動くということである。タイム／タイミングという概念については、スタシクによるガーナのバスターミナルの研究から多くを学んだ（Stasik 2017）。

- 17) 私が専門的知識の提供というかたちで参画したNHK WORLDのドキュメンタリー番組NHK Asia Insightの“Philippine Urban Poor at the Mercy of Developers”（2017年8月17日放送）においても、この「平日ホームレス」と世帯構成の変化こそが主題となった。<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/asiainsight/20180907/2022207/>を参照。
- 18) バクラとは、性的マイノリティの一類型を指すタガログ語である。
- 19) 1970年代後半にシルビア・グエルレロが書いた論文のタイトルは「活動があるところに居住する（Staying where the action is）」というものだった（Guerrero 1977）。「活動がある」こと（「家がある」ことではなく）が、再居住においていかに重要であるのかが、ここからもわかる。
- 20) カラオスは、パシグ・マリキナ川河川改修事業（Pasig-Marikina River Channel Improvement Project）のために、マニラ市のプンタ・サンタ・アナからブラカン州の4つの再居住地に移住した人びと（パンディ：2世帯、バラグタス：19世帯、サン・ホセ・デル・モンテ：20世帯、タワービル6G：13世帯の計54世帯）について調査した。この河川改修事業は、河川沿い10メートル以内に居住する人びとを再居住とするものであった。2013年10月に54世帯であった対象者は、2016年12月段階では20世帯にまで減っていた。34世帯は、この3年間のうちに再居住地から姿を消したのである。この調査からも、再居住地には人びとが定着しない事実がわかる。
- 21) マニラ首都圏におけるスクオッター住人の世帯構成については、石岡（2012）の第5章を参照。

文 献

- Beltran, M., 2019, The Towns the Homeless Built, *New Naratif* 2019/7/12. <https://newnaratif.com/journalism/the-towns-the-homeless-built/share/xuna/a8feb808cbe90c69dec9d4f78c9529b6/>（2020/3/17 確認）
- Cernea, M., 1997, The Risks and Reconstruction Model for Resettling Displaced Populations, *World Development* 25(10): 1569-1588.
- Cernea, M., 2000, Risks, safeguards and reconstruction: A model for population dis-

- placement and resettlement, *Economic and Political Weekly* 35(41): 3659-3678.
- チャタジー, パルタ, 2015, 『統治される人びとのデモクラシー——サバルタンによる民衆政治についての省察』 世界思想社.
- Choi, N., 2015, Impacts of Displacement on Urban Livelihoods: a Ailway Project in Metro Manila, *Development in Practice*, 25(5): 643-654.
- Guerrero, S.H., 1973, The Culture of Poverty in Metro Manila: Some Preliminary Notes, *Philippine Sociological Review* 21: 215-221.
- Guerrero, S.H., 1977, Staying Where the Action Is: Relocation within the City, *Philippine Sociological Review* 25: 51-56.
- Hollnsteiner, M. R., 1970, Utopia or Dystopia: Man and Environment in Metropolitan Manila, *Philippine Sociological Review* 18: 185-198.
- 石岡丈昇, 2012, 『ローカルボクサーと貧困世界——マニラのボクシングジムにみる身体文化』 世界思想社.
- 石岡丈昇, 2015, 「マニラのスクオッター強制撤去——慣習行動の強制再編について」『理論と動態』 8: 110-127.
- Karaos, A. M., 1993, "Manila's Squatter Movement: A Struggle for Place and Identity," *Philippine Sociological Review* 41: 71-91.
- Karaos, A. M., 2017, *Lessons Learnt of Livelihood Restoration in JICA's Project*, the paper presented in JICA's Development Partners Asia Half-Day Breakout Sessions.
- Navarra, M. Q., 2014, *Mending New Communities After Involuntary Resettlement in the Philippines and Indonesia*, Ph.D dissertation at Wageningen University.
- Ortega, A. A., 2018, *Neoliberalizing Spaces in the Philippines: Suburbanization, Transnational Migration, and Dispossession*, Ateneo de Manila University Press.
- Portes, A., 1972, Rationality in the Slum: An Essay on Interpretive Sociology, *Comparative Studies in Society and History* 14(3): 268-286.
- Roy, A., 2003, *City Requiem, Calcutta: Gender and the Politics of Poverty*, University of Minnesota Press.
- Roy A, 2005, Urban Informality: Toward an Epistemology of Planning, *Journal of the American Planning Association* 71(2): 147-158.
- 坂本真司, 2010, 「ヴィレッジフォンとエンパワメント」 佐藤彰男, I・U・チョドリ, 坂本真司, 鳩貝耕一『ヴィレッジフォン——グラミン銀行によるマイクロファイナンス事業と途上国開発』 御茶の水書房.

- 佐々木徹郎, 1982, 『コミュニティ・デベロップメントの研究』 御茶の水書房.
- シュッツ, アルフレッド, 1997, 『現象学的社会学の応用』 御茶の水書房.
- Smith, N., 2002, New globalism, new urbanism: Gentrification as global urban strategy, *Antipode* 34(3): 427-450.
- スミス, ニール, 2014, 『ジェントリフィケーションと報復都市——新たなる都市のフロンティア』 ミネルヴァ書房.
- Stasik, Michael, 2017, Rhythm, Resonance and Kinaesthetic Enskilment in a Ghanaian Bus Station, *Ethnos*, 82(3): 545-568.
- Wacquant, L., 2007, *Urban Outcasts: A Comparative Sociology of Advanced Marginality*, Polity Press.

